

[研究ノート]

小学校「道徳」副教材の語彙分析
—動詞の意味範疇に焦点をあてて—

An Analysis of Vocabulary of Supplementary Material
for Moral Education in Elementary School
- Focus on categories of verbs-

西田 文乃
Fumino NISHIDA

Studies in Humanities and Cultures

No. 30

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 30号
2018年7月
GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN
JULY 2018

[研究ノート]

小学校「道徳」副教材の語彙分析

— 動詞の意味範疇に焦点をあてて —

An Analysis of Vocabulary of Supplementary Material for Moral Education in Elementary School - Focus on categories of verbs-

西田 文乃
Fumino Nishida

はじめに

1. 「道徳」副教材の位置づけ
2. 語彙分析
 - 2.1 分析方法
 - 2.2 計量的視点による分析
 - 2.3 意味範疇による分析（動詞）
3. 比較検討

おわりに

要旨 本稿では、小学校1、2年生用道徳用副教材『こころのノート』、その後改めて出版された『わたしたちの道徳』を語彙の観点から分析、比較した。語彙の比較は、計量的な視点からの分析と意味範疇での分析とで行った。意味範疇での分析とは、道徳副教材2種にて使用されている全動詞を小学校低学年の主要教科である「国語」「算数」「生活」の教科書で使用されている動詞を意味で比較し、「道徳」特有の語彙特性を示すというものである。

その結果、計量的な分析では『こころのノート』から『わたしたちの道徳』へと全面改訂されたことによりページ数が増加しそれに比例して語彙数は増加したが、文章の表現などは単純化傾向が示された。また動詞の意味からの分析では道徳副教材は他教科と違う傾向を見せた。つまり道徳は他教科とは違い「精神および行為」に分類される動詞の使用率が高いことがわかった。道徳の副教材『こころのノート』が『わたしたちの道徳』へと全面改定されたのは「教科としての道徳」を見据えたものであった。

キーワード：道徳の教科化、道徳副教材、『こころのノート』、『わたしたちの道徳』、語彙分析、動詞の意味範疇

はじめに

小学校においては2018年度から「道徳の時間」が教科化され「特別の教科 道徳」となる。それに合わせ2017年3月には教科として初めての教科書検定が行われ24点の教科書が合格となった¹。これら検定教科書の分析は急がれようが、まずは教科書が存在していなかった2017年度における「道徳の時間」に子どもたちは、どういった副教材で何を学んでいたのか、この素朴な疑問について改めて問い直すべきではないだろうか。

2017年度、「道徳の時間」の副教材が「検定教科書に対するロールモデル」であるという発言が、一部でなされた²上で、初の教科書検定が行われた。これが検定教科書を制作する牽引車としての「道徳の時間」の副教材であったことを示唆するものならば、まずは「道徳の時間」の副教材について捕捉することが、今後行われていく検定教科書研究にとって必須のことと考えるからである。つまり文部科学省が学習指導要領以外に検定教科書の礎石として示したのを知ることは、「特別の教科 道徳」とは何かという大きな問いを解き明かす嚆矢となると考えるものである。

本稿では「道徳の時間」の副教材として2002年から文部科学省により全ての生徒に配布された『心のノート』³、そして2014年から配布された『私たちの道徳』について計量言語学の手法を用いて検討を行った。

「道徳」の先行研究は、①理論・哲学検討 ②教育制度の通時的共時的検討 ③教材検討 ④指導法検討 といった流れに大別されようが、現状では④指導法検討の研究が大半である。本稿は③の教材検討というアプローチで「道徳」に近づこうとするものである。この教材検討という方法をもって「道徳」を解明しようとした先行研究を更に繙くと、登場人物⁴、内容と政治的意図との関連性⁵、また「キーワード」⁶、などの観点で分析したものが挙げられる。また『心のノート』から『私たちの道徳』への連続性や両書の比較についてもいくつか重要な指摘⁷がみられる。これら教材検討研究は、教材の「分析」と謳いながらも、教材の意図を推しはかり、どのように授業に用いるのか等、指導方法を論じたものが圧倒的に多かった。

本稿では、『心のノート』と『私たちの道徳』の両書の語彙分析を行う。語彙分析とは「数理的な方法で言語現象を扱うことを目指しており言語現象を質量に還元し計測するという方法論」⁸である。この方法論で教材を調査・分析することは古く大正期から行われてきた⁹。戦後までの調査

¹ 文部科学省「(2017年3月)平成28年度教科用図書検定結果の概要」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/kentei/1383592.htm (2018/02/20 閲覧)

² 「道徳教育の充実に関する懇談会(第8回)議事要旨 15番目、同上(第9回)50番目 発言

³ 教材のタイトルは『心のノート』であるが、小学校1・2年生用の教材は『こころのノート』というタイトルになっている。以後全体的な教材を指すときは『心のノート』と記載し、小学校1・2年生用を限定的に指すときには『こころのノート』と記載する。なお『私たちの道徳』についても同様である。

⁴ 歌川光一・鈴木翔著「登場人物にみる『私たちの道徳』の特徴 ―その活用方法および留意点を視野に入れて」2016,名古屋女子大学紀要62(人・社), pp.185-194

⁵ 時津啓「小学校『私たちの道徳』の分析 ―その政治的文脈と内容との関係に注目して」2015, 広島化学圏大学学芸学部紀要(5), pp.29-39

⁶ 渡辺容子「道徳の時間の教材―読み物教材にみる家族」2017, 近畿大学生物理工学部紀要(39), pp.11-18

⁷ 山本由美「道徳教科書の背景にあるグローバリズム―『心のノート』から『私たちの道徳』への変更が持つ意味とは」2014, 人間と教育82, pp.62-69

⁸ 李在鎬編『文章を科学する』2017, ひつじ出版, p.61

⁹ 国立国語研究所著編『国立国語研究所報告1 1 6 日本語基礎語彙―文献解題と研究』2000, 明治書院, p.3

の多くは国語教科書の語彙分析であったが、昭和23年(1948年)に小学校低学年の国語、算数、音楽の教科書の語彙分析が行われている。この語彙分析は「戦後直後の日本語学校教育の実態を示す資料」として作成され、GHQに置かれた民間情報教育局に提出されたということである¹⁰。つまり、語彙を調査・分析する意義は、教科書に記載されている語彙を見渡すことで教育の実態を把握することであった。その後、複数教科の教科書の語彙を調査・分析し比較する研究が徐々に始まり、昭和55年(1980年)には、中学校の全教科(国語・社会・数学・理科・音楽・美術・保健体育・技術・家庭・英語)の教科書を全学年に渡って分析した研究も現れた¹¹。この研究の目的は、多教科にまたがって使用されている語彙の重なり具合から、中学校の教科を学習するにあたっての重要語彙を選出することや、その教科特有の語彙から教科の特徴を見出すことであった。その後、コンピューターでの大がかりな分析が可能になるにつれ、そういった語彙分析の目的に加え、「書き手の特徴を表す『文体』を量的に捉える」¹²ことを目的とした計量文体論やリーダビリティ研究の基礎資料としての意義が付加されていく。

本稿での語彙分析の意義をここで再度確認しておく、上にあげた本来的な語彙分析の目的に加え、道徳教材としては初の語彙分析である点である。語彙分析という方法論が確立されてから様々な教科の教科書が分析されてきた。しかし道徳は2018年3月までは教科ではなかったために教科書も名目上は存在しておらず、全教科の語彙分析研究がなされても、道徳はそこから抜け落ちていたのである。道徳教育の多くは、読み物資料から道徳的価値を読み解き、道徳的な考え方を学んでいく手法を取ってきた。そのため読み物資料に関わる指導法の研究に注力されてきたと言える。その一方で子どもたちは教師と共に、読み物資料にある語彙を用いて話し合い、学んでいるにも関わらず、その語彙にどんなものが選択されているのか、語彙が持つ意味傾向がどのようなものであるのかは全く研究されてこなかった。つまり、本稿は道徳教育研究の中では、全く新しいタイプの研究だと言える。

具体的な分析方法は、両書において掲載されている全文をテキスト化した上で形態素解析器により語彙を抽出、つまり掲載されている全語彙を表出させる。そしてそれらをいくつかの視点で分析、比較を行うものである。比較対象は、道徳の2つの副教材に加え、他教科の教科書の語彙とも行う。先行研究と同様、他の教科と比較することで教科の特徴を際立たせるためである。本稿では、特に品詞、語種、意味範疇に注目して分類、比較を行った。これらは、統計的データの中でも質的データとされ、統計的な有意差で何かを指し示すことは困難であるが、比較検討を丹念に行うことで「道徳の時間」において、無意識に使用されていた語彙の特徴を顕在化させることは可能であると考えられる。これが本稿の第1の目的となる。

¹⁰ 前掲 国立国語研究所著編『国立国語研究所報告116 日本語基礎語彙—文献解題と研究』, pp.72-73

¹¹ 同上 pp.174-175

¹² 前掲 ¹² 李在鎬編『文章を科学する』, p.61

1.道徳「副教材」の位置づけ

本稿の分析対象である道徳の副教材がいかなる背景のもと生み出され、どのような意味を持つものかを理解するために、まずは戦後の道徳教育政策の流れを下表で概観する¹³。

表 1 戦後の道徳教育政策推移

1945年(昭和20) 12月31日	連合国軍最高司令部(GHQ)により「修身、日本歴史及び地理停止二閣スル件」として「文部省ハ修身、日本歴史及び地理夫々特定ノ学科ノ教授法ヲ指令スル所ノ一切ノ法令、規則又ハ訓令ヲ直チニ停止スルコト」という指令が出され ¹⁴ 、教科としての修身が廃止となった ¹⁵ 。
1951年(昭和26) 1月4日	「道徳教育振興に関する答申」が示され「道徳教育を主体とする教科あるいは科目を設けることは望ましくない(中略)道徳教育を主体とする教科あるいは科目は、ややもすれば過去の修身科に類似したものになりがちであるのみならず、過去の教育の弊に陥る糸口ともなる恐れがある」としながらも「(前略)道徳教育の振興については、至急、積極的な方策をたてられんことを要望する。」と道徳教育の必要性が強く説かれた。
1958年(昭和33) 3月15日	教育課程審議会の答申で「道徳」の時間が定められ、同年の10月には小学校学習指導要領の告示で、道徳の具体的な目標が示された。 *ここでは教科としては取り扱わないことが確認されている。
1963年(昭和38) 7月11日	「学校における道徳教育の充実方策について」が答申され、道徳の改善の方針が示された。1958年にはなかった「愛国心」についての記述がある ¹⁶ 。
1967年(昭和42) 10月30日	「小学校教育課程の改善について」(答申)で、道徳の目標をいっそう明確に表現するよう求められた。
1987年(昭和62) 12月24日	教育課程審議会答申で、再び道徳の改善の方針が示され道徳の基盤は「人間を尊重する精神や生命に対する畏敬の念を培う」ことであるとされた。これにより道徳の範囲は、それまでの子どもたち自身、身の回り、そして社会との関わりを範疇とする目に見える世界から精神世界にまで一気に広がった。
1998年(平成10) 7月29日	教育課程審議会に答申された道徳の改善方針で「道徳の時間の授業時間数の確保」や「校長が指導力を発揮し学校全体で取り組む」ことが指示された。
2008年(平成20) 1月17日	中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」で道徳教育の充実と強化が指示され、家庭、地域社会に道徳教育への参加を求めた。また指導に大きな役割を果たす教材の充実が重要であり、学習指導要領の趣旨を踏まえた適切な教材を教科書に準じたものとして十分に活用するような支援策を講ずる必要性があるとした。
2013年(平成25) 2月26日	教育再生実行会議の第一次提言「いじめ問題等への対応について」において道徳の教科化がいじめ問題の解決方法であるとされた。
2014年(平成26) 10月21日	中央教育審議会「道徳に掛かる教育課程の改善等について」の答申で、道徳を教科と位置付けることが明言された。これに伴い検定教科書の導入、指導方法、評価の充実についての検討が求められた。
2015年(平成27) 3月27日	小・中学校学習指導要領の一部改正等により、道徳は「特別の教科 道徳」として教科化されることが告示された。
2016年(平成28)	道徳の教科書検定が実施され2017年に採択。
2018年(平成30)	小学校において教科としての道徳が全面实施される。

¹³ 経緯は国立教育政策研究所『教育課程の改善の方針、各教科等の目標、評価の観点等の変遷—教育課程審議会答申、学習指導要領、指導要録(昭和22年~平成15年)—』2005を参考に文部科学省ホームページ「審議会別 諮問・答申等一覧」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/toushin.htm (2017/9/30 閲覧)から抜粋した。

¹⁴ 文部科学省「連合国軍最高司令部指令」, http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317996.htm (2017/9/30 閲覧)

¹⁵ 文部科学省『日本の成長と教育』第3章2(3)教科内容—道徳教育を中心として,1962

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad196201/index.htm (2017/9/30 閲覧)

¹⁶ 基本方針(三) 今日の世界における日本の地位と果たすべき重要な使命にかんがみ、国民としつつかでの[原文ママ]自覚を高め、公正な愛国心を培うように一層努力する必要がある。(2017/9/30 閲覧)

以上、戦後から73年という月日をかけ道徳が「教科」となった流れを概観したが、1998年が分水嶺となり道徳教育政策が大きく転換したことが見て取れる。それまでは「道徳の目標」を定めるための改善作業が主なトピックであり1987年に道徳の基盤が示されたところで、ひとまずそれらの作業は落ち着きをみせた。その後1998年から今日までの20年で、道徳の時間数の確保、学校挙げての取り組み指示、家庭、地域社会に道徳教育への参加要求、新規教材、社会問題化しているいじめとの関連化、指導方法、評価、教科化と矢継ぎ早に政策が打ち出されている。この道徳の転換点とも言える1998年の答申をうけて2002年に作成されたのが『心のノート』である。これは全国の全ての小中学生に無料で配布された。文部科学省によると「子どもたちが身に付ける道徳の内容を分かりやすく表し、道徳的価値について自ら考えるきっかけとし、理解を深めていくことができる教材」¹⁷であるとしている。教科書検定を経ない「国定教科書」ではないかという疑念に対しては、配布にあたり4月22日に文科省から出された『『心のノート』について（依頼）』（14文科初第125号）の配布資料『『心のノート』の活用に当たって』に回答が用意されている。

「心のノート」は、その作成意図、内容、活用方法等から考えて、当然のことながら、児童生徒用の主たる教材としての教科書ではない。また、道徳の時間においては、副読本として読み物資料が中心的な資料として用いられることが多いが、「心のノート」は、この種の副読本などに代わるものでもない。（中略）「心のノート」は、教科書でもなく、中心的な資料として活用される副読本などに代わるものでもない（後略）

以上のように『心のノート』は、教科書やそれを補う副読本ではないと明言している。言わば中心的に使用することはない「副教材」の扱いである。しかしながら配布の翌年の2003年（平成15年）の文部科学省の道徳教育推進状況調査によると¹⁸、道徳の時間に使用する教材として『心のノート』を挙げた割合は小学校では97.1%、中学校は90.4%にのぼる。主教材が存在しない中でこの使用割合が示すのは、位置づけは「副教材」としながらも実態は「道徳の時間」に使用する中心的な教材、つまり教科書として機能していた、または教科書として機能させようとするある種の「力」が存在していたと考えるのが自然であろう。『ただ配布しただけ』もしくは『教室のうしろに積みあげたままにしてある』²⁰と答える教師がいる中で、このような高い使用率がそれらを示している。

¹⁷ 文部科学省『平成14年度 文部科学白書新しい時代の学校～進む初等中等教育改革～』2002, 第1部 第3章第3節2
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200201/hpab200201_2_027.html (2017/9/30 閲覧)

¹⁸ 文部科学省ホームページ「道徳教育の状況」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/019/gijiroku/06080911/003/003.htm (2017/9/30 閲覧)

¹⁹ 『心のノート』の使用調査自体が『心のノート』の使用を強要するものであり、『心のノート』の調査を止めることを求めた申し入れ書もある。一宮市教職員労働組合『『心のノート』の調査についての申し入れ書』2003年,
http://userwww.aimnet.ne.jp/user/pjbekh/syokukai/mousiire/2003_02kokoronote.htm (2018/3/4 閲覧)

²⁰ 岩川直樹・船橋一男編著『「心のノート」の方へは行かない』2004, 子どもの未来社, pp.148-150

その後、政権交代により『心のノート』の配布は一時中断され web 版に切り替えられたが、自民党に政権が戻り、配布が再開された。翌年の2013年には「道徳教育の充実に関する懇談会」が発足し、『心のノート』の内容見直しが行われ、2014年に『心のノート』を全面改訂した『私たちの道徳』が作成配布された。この10回に亘る懇談会の議事録及び配布された資料を丹念に読むと、改訂のエッセンスが自ずと浮かび上がる。つまり『心のノート』は読み物資料が入っていないため²¹、道徳の時間すべてにこの1冊で完結することは難しく、教える教師が他の資料などを補足して授業が行われている²²ことが一般的である。また道徳の授業で教えるべきことが網羅的に子どもに教えられていないという懸念も残る²³。今後、道徳の時間の中心的なものとしての活用を促すために、と同時に全国で統一的なものを子どもに教えていくため²⁴に、学習指導要領に示された内容項目ごとに読み物部分とノート部分をセットにしたものを作成する必要がある²⁵ということである。これを基に考えられた結果が今回の検定教科書であろう。『心のノート』『私たちの道徳』と検定教科書との関係性については、検定教科書に対するロールモデル²⁶、或いは検定教科書が出揃うまでの当面の教材²⁷、というものである。

以上のことから①『心のノート』と『私たちの道徳』の両書は「副教材」という名を持ちながら、実質は道徳の主教材として子どもたちに届けられている ②この1冊だけで道徳の時間が完結するようにと『心のノート』に道徳的読み物資料が加えられた『私たちの道徳』であるが、その実、全国の子どもたちに同質の道徳項目がもれなく届くよう、また他の異質なものが届かないように改訂されたものである と考える。このように道徳「副教材」は、その冊子の意味合いに於いて、そして改訂の趣旨に於いて、二面性を併せ持っている整理できたわけだが、ではその内容についてはどうだろうか。次章以降でこの両書について語彙の検討を行う。

2. 語彙分析

2.1 分析方法

本章では、道徳の「副教材」『心のノート』と『私たちの道徳』並びに比較対象とするために他教科の語彙を分析する。「語彙」とは語を要素とする集合を指す²⁸。語彙の調査研究は日本においては古く大正時代から現在に至るまで数多くの研究がなされてきた²⁹。「個々のテキストについ

²¹ 「道徳教育の充実に関する懇談会（第1回）」議事要旨 26,27,29,30,31,33 番目発言

²² 同上 31 番目発言

²³ 同上 20,22 番目、(第3回)議事要旨 1,7,10 番目、(第4回)議事要旨 1 番目、(第9回) 42 番目、(第10回) 3 番目発言

²⁴ 同上 (第7回) 議事要旨 2,7,9 番目発言

²⁵ 同上 (第4回) 議事要旨 20,30 番目発言

²⁶ 同上 (第8回) 議事要旨 15 番目、同上 (第9回) 50 番目 発言

²⁷ 同上 16 番目発言

²⁸ 計量国語学会編『データで学ぶ日本語学入門』2017,朝倉書店, p23

²⁹ 国立国語研究所『日本語基礎語彙一文獻解題と研究』2000, 明治書院

て（中略）分布を調べることにより、そのテキストの意味的な特徴が浮かび上がってくる」³⁰ という言葉がその理由であり、語彙調査、分析の意義となろう。道徳の「副教材」の2冊も、文章（テキスト）により表現されているため、語彙分析により本稿の目的である両教材の特徴を表出させることが可能といえる。更に言えば、文章は語が集積された語彙で構成されているため、特徴を表すことに留まらず、書き手が伝えたいことも自ずと現れると考える³¹。

本稿では先行研究の多くが用いてきた文章の計量的分析方法に倣い、具体的分析方法を以下の通りとする。語彙の調査単位は短単位³²を用いる。短単位とは、主として言語の形態的な側面に着目した単位で、現代語において意味を持つ最小の単位である。①基準が分りやすくゆれが少ない、②取り出した単位が文脈から離れすぎない ことがその長所に挙げられており、多くの教科書の語彙調査に採用されてきた。

教材にある文から短単位に区切る作業は、形態素解析器 web 茶まめ³³を使用する。web 茶まめとは各種の UniDic(日本語テキストを単語に分割し形態論情報を付与するための電子化辞書³⁴)を使って形態素解析を行うためのツールで、形態素解析に必要な一連の橋渡しの作業を Web 上で簡易に行えるソフトである。この解析器における形態素解析辞書³⁵は「現代書き言葉 UniDic」とする。近年注目されている語彙の分析ツールとしては KH Coder がある。これはいわゆるコンコーダンスソフト（用語を検索したり、キーワードを含む例文を検索したりするソフトウェア）であり「言語研究の分野ではなく、社会学、社会調査という異なる背景の中で開発」³⁶され計量テキスト分析に力を発揮するものである。一方の web 茶まめは、自然言語のデータを解析するためのソフトの1つで日本語テキストを単語に分割し、形態論情報を付与することに特化し開発されたものである。本稿の目的は、道徳副教材がどのような語彙で構成され、どのような意味範疇であるのかを明らかにするものである。このため本稿ではより目的に近い web 茶まめを使用することにした。解析された語には書字形、発音形、語彙素読み、語彙素、品詞、活用、語種などの情報が付与される³⁷。

対象教材は①『こころのノート』小学校1・2年 ②『わたしたちの道徳』小学校1・2年 とする。両書は他に小学校3・4年用、5・6年用、中学校用も発行されているが、初めて学びに接する小学校低学年児が触れる語彙は、その後子どもたちの思考の基盤となると考えることから、1・2年生用教材を分析することにした。

³⁰ 同上 計量国語学会編『データで学ぶ日本語学入門』p22

³¹ 計量国語学会編集『計量国語学事典』2009, 朝倉書店, p94

³² 国立国語研究所「コーパス開発センター」形態語情報 http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/morphology.html (2017/9/30 閲覧)

³³ 国立国語研究所「コーパス開発センター」web 茶まめ <http://chamame.ninjal.ac.jp> (2017/9/30 閲覧)

³⁴ 国立国語研究所「UniDic とは」http://unidic.ninjal.ac.jp/about_unidic(2017/3/4 閲覧)

³⁵ 同上 http://unidic.ninjal.ac.jp/about_unidic(2017/9/30 閲覧)より。国立国語研究所の規定した斉一な言語単位と、階層の見出し構造に基づく電子化辞書のこと。

³⁶ 前掲 李在鎬編『文章を科学する』p.82

³⁷ 小椋秀樹他「形態論情報規定集第4半(上)」『現代日本語書き言葉均衡コーパス』2011, 国立国語研究所

基礎データの作成方法だが、「副教材」の表紙、目次、奥付、裏表紙を除いた全ての文字をテキスト形式にて書き起こした後、web 茶まめにて解析する。その解析後データを excel 形式にて出力し、以下のデータクレンジング操作を行う。

- ① 空白の除去
- ② 句読点の除去
- ③ 本文と解析データを照査し茶まめの解析が明らかに違っているデータを修正

例：1次データでは「とべ」を「飛べ（動詞）」と自動的に解析しているが本文で確認すると地域名の「砥部（固有名詞）」であるので、これを修正する。小学校低学年は漢字の使用が少なく多義語の場合は誤解析される例が多く見られた。

- ④ 修正後のデータを元データとし、品詞毎に集約し基礎データを作成

Web 茶まめの解析で品詞は54種の設定がある。一次作業は教材の中で使用されている品詞別に集約する。次の作業で名詞、動詞、形容詞、副詞の自立語を抽出し基礎データとする。これら品詞は文の意味に大きく貢献するからである。

- ⑤ 基礎データのうち動詞について『分類語彙表』を用いて意味範疇を調査

- ⑥ ④⑤で得たデータをいくつかの項目において比較検討

比較検討する教材は以下の通りである。

- a. 道徳副教材『こころのノート』と『わたしたちの道徳』
- b. 道徳副教材2冊と小学校低学年の主要教科の教科書

2017年度まで使用された道徳副教材と2018年度からの道徳の教科書との比較は今後行うこととして、まずは道徳の副教材と主要教科の教科書を比較する。2017年度までは、副教材が主教材であるかのように用いられてきた実態があったからである。小学校低学年の語彙は、もとより少ない。その中で道徳という1つの教科の中での副教材の比較から特徴を示すことは難しいと考える。そのため同じように限定的な語彙で教材を作成している他の教科との比較することにした。比較対象の主要教科「国語」「算数」「生活」の教科書は次の3種である。道徳用副教材が1・2年生用と学年を跨いでいるため国語、算数については2年生用下、生活については1・2年生用の下の教科書を使うこととした。

- ・国語教科書 2年下 光村出版
- ・算数教科書 2年下 啓林館
- ・生活教科書 下 大日本図書

なお教科書は教科毎に数社から出版されているが便宜的に2017年度名古屋市で使用されている教科書会社のものを選んだ。

2.2 計量的視点による分析

上で示した基礎データを以下の項タイトルで抽出した。

2.2.1 ページ数

表 2 ページ数

『こころの』	『わたしたちの』
103 頁	176 頁

表紙、裏表紙を除いたページ数の比較である。『こころのノート』から『わたしたちの道徳』へ 73 頁 (1.7 倍) の増となっている。『こころのノート』は何を学ぶべきなのかをコンパクトに整理され、絵が中心で文字数が少ないものであったが、『わたしたちの道徳』は読み物資料が中心で、それ以外の付随資料もあったため、ページ数が増えるのは当然であった。目次からその全体像がつかめるので写真を図 1, 2 として下に転写した。

もくじ			
● うつくしい 心を そだてよう	4	◆ どんな 気持ちかな	54
● この ノートの つかい方	6	■ いのちに ふれよう	55
● あなたの ことを 教えてね	8	みんな みんな 生きて いるよ	56
● うつくしい 心を そだてよう	10	生きものを そだてよう	60
◆ にこにこ してるかな	12	心 いっぱいに かんじよう	64
■ むねを はって いこう	13	生きているね、つながっているね。かがやいているね。	68
気持ちの いい 一日	14	◆ みんなで なわとび	70
がんばってるね!	18	■ みんなと 気持ちよく いよう	71
よいこと すずんで	22	みんなて 楽しく 気持ちよく	72
うそなんか つくもんか	26	大切な それぞれの しごと	76
休も元気! 心も元気!	30	家そくが 大きき	80
しては ならない ことが あるよ	32	おせわに なってます!	84
◆ 立てるかな	34	あなたが そだつ 可	88
■ 心と 心を むすぼう	35	みにつけよう きまりを まもる 心の バッジ	92
あいさつは 心の リボン	36	● がんばつてよ うれしかつたよ てきように なつたよ!!	94
あたたかい 心を とどけよう	40	● あのね……ごんな 道とくの へお強を したよ	96
友だちと いっしょ	44	● 心のアルバム 1年	98
ありがとうを さがそう	48	● 心のアルバム 2年	100
どんな 人と 出会えるかな、あい手の 心を かんじよう。	52	● 駅の 人からの 手紙	102

図 1 「こころのノート」もくじ

もくじ		
● この 本の つかい方	4	① 自分を見つめて
● あなたの ことを 教えてね	6	② 人とともに
① 自分を見つめて	8	③ 3つの心をつなげて
② 人とともに	16	④ 3つの心をつなげて
③ 3つの心をつなげて	20	
④ 3つの心をつなげて	22	
⑤ 3つの心をつなげて	28	
⑥ 3つの心をつなげて	32	
⑦ 3つの心をつなげて	38	
⑧ 3つの心をつなげて	42	
⑨ 3つの心をつなげて	44	
⑩ 3つの心をつなげて	48	
⑪ 3つの心をつなげて	52	
⑫ 3つの心をつなげて	54	
⑬ 3つの心をつなげて	60	
⑭ 3つの心をつなげて	64	
⑮ 3つの心をつなげて	66	
⑯ 3つの心をつなげて	70	
⑰ 3つの心をつなげて	74	
⑱ 3つの心をつなげて	78	
⑲ 3つの心をつなげて	82	
⑳ 3つの心をつなげて	88	
㉑ 3つの心をつなげて	90	
㉒ 3つの心をつなげて	96	
㉓ 3つの心をつなげて	100	
㉔ 3つの心をつなげて	102	
㉕ 3つの心をつなげて	106	
㉖ 3つの心をつなげて	110	
㉗ 3つの心をつなげて	116	
㉘ 3つの心をつなげて	118	
㉙ 3つの心をつなげて	124	
㉚ 3つの心をつなげて	128	
㉛ 3つの心をつなげて	130	
㉜ 3つの心をつなげて	134	
㉝ 3つの心をつなげて	144	
㉞ 3つの心をつなげて	150	
㉟ 3つの心をつなげて	154	
㊱ 3つの心をつなげて	158	
㊲ 3つの心をつなげて	162	
㊳ 3つの心をつなげて	166	
㊴ 3つの心をつなげて	170	
㊵ 3つの心をつなげて	174	

図 2 「わたしたちの道徳」もくじ

2.2.2 品詞別異なり語数

『こころのノート』『わたしたちの道徳』の全データを品詞毎に集約したものが表3である。

表3 道徳副教材における品詞別延べ語数

	『こころ』	『わたしたちの』
名詞	1,328	2,811
動詞	689	1,582
形容詞	189	375
副詞	107	223
小計	2,313	4,991
	53.9%	49.6%
その他	1,980	5069
	46.1%	50.4%
合計	4,293	10,060

この全データの中から、形容詞、動詞、副詞、名詞を抽出し、更に動詞、形容詞については非自立的な語を、名詞については数詞、代名詞等を除去したものが下表である。

表4 道徳副教材における4品詞（延べ語数と異なり語数）

	『こころの』			『わたしたちの』		
	延べ	異なり	異なり/延べ	延べ	異なり	異なり/延べ
名詞	1,165	321	27.6%	2,521	628	24.9%
動詞	349	132	37.8%	808	239	29.6%
形容詞	120	34	28.3%	213	69	32.4%
副詞	107	38	35.5%	223	88	39.5%
計	1,741	525	30.2%	3,765	1,024	27.2%

「延べ」とは延べ語数のことで、テキストデータに出てきた語を全て1とカウントしたものである。同じ語が複数出てきた時に、その複数回がデータにカウントされている。「異なり」とは異なり語数のことで、同じ言葉が複数回出現しても1つの語とカウントしたものである。つまり異なり語数/延べ語数の割合が低ければ低いほど、同じ語の使用頻度が高いということである。『こころのノート』から『わたしたちの道徳』へ頁数は大幅な増となっており、それに伴い語彙数も増えている。ただし異なり語数/延べ語数の割合は減少している。つまり同じ語の繰り返しが多いということである。

この語彙数について小学校低学年にとって適当な数であるか、特によく似ていると比較対象になる国語と比較するために異なり語数³⁸との比較したのが表5である。

表 5 小学校主要3教科教材における品詞別異なり語数

	『こころの』	『わたしたちの』	国語	算数	生活
名詞	321	628	563	264	985
動詞	132	239	315	108	266
形容詞	34	69	67	22	69
副詞	38	88	71	12	35
計	525	1,024	1,016	406	1,355

『わたしたちの道徳』は、国語の教科書と、品詞別異なり語数で同様の傾向を示した。道徳の読み物資料は国語の教科書と同じように見えると言われることがあるが、品詞の構成からすると『わたしたちの道徳』と国語の教科書はほぼ変わらないため、そのような感想が出てくるのも理解できる。これをグラフ化したものが下図である。

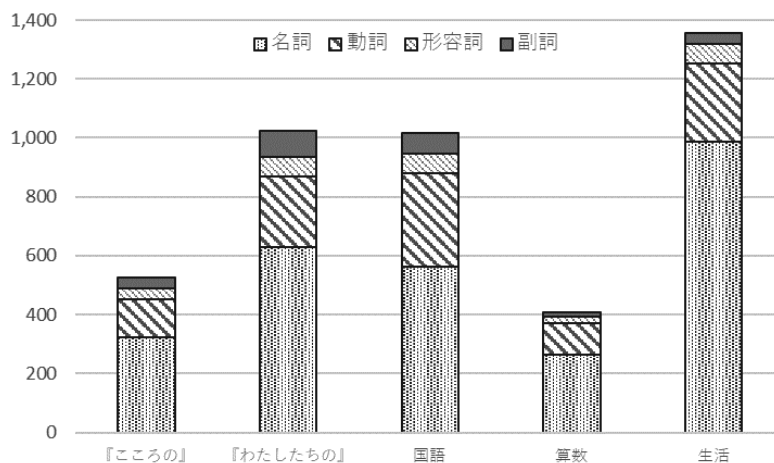


図 3 道徳副教材の低学年教科書との品詞別比較

2.2.3 語種（延べ語数）

³⁸ 西田文乃「JSL 児童の日本語能力評価について」2016,名古屋市立大学人間文化研究科修士論文の語彙調査より数字を抜粋して作成した。

語種とは、語彙を出自・由来にて分類する方法である³⁹。語種の分布はそれ自体、文に意味を付与しないが、文章の傾向や難易度を示すことができる。下表は道徳副教材を語種にて分類した延べ語数である。『こころのノート』から『わたしたちの道徳』では和語が増加し、漢語が減少した。

表 6 道徳副教材語種別比較

	『こころの』	『わたしたちの』	小学校前半教科書
和語	82.0%	86.4%	68.3%
漢語	14.4%	9.5%	27.1%
混種語	2.3%	3.3%	1.1%
外来語	1.4%	0.7%	3.5%
	100.0%	100.0%	100.0%

表6の小学校前半教科書とあるのは、近藤、田中による国立国語研究所の当時構築中であった教科書コーパスに基づいて調査考察した先行研究⁴⁰である。これは小学校1年生から3年生までの全教科書の延べ語数におけるの語種である。国語辞典における語種分布は和語が33.8%、漢語49.1%、混種語、8.8%、外来語8.8%である⁴¹。ことを考えると道徳副教材は、和語の割合が非常に多い構成と言えよう。

2.3 意味範疇による分析（動詞）

2.2では道徳副教材で使用されている語について「数」という切り口から分析したが、ここでは「意味」に焦点をあてる。対象の品詞は動詞とする。動詞は、①単独で述語の働きをする ②述語として事態を表現する ③動きと状態に分けられる⁴²。ため文の意味に大きく寄与し、更に言えば使用されている動詞によりその教材の特徴が明らかになるのではないかと考えるからである。

意味の分類は、国立国語研究所編の『分類語彙表増補改訂版』⁴³ならびにweb上で公開されている「分類語彙表—増補改訂版データベース」⁴⁴で行った。同本の元版まえがきには「分類語彙表というのは、一般に一つの言語体系の中で、その語を構成する一つ一つの単語が、それぞれのどのような意味で用いられているかを一覧できるように、単語が表し得る意味の世界を分類して、その分類の各項にそれぞれの単語を配当したものである」⁴⁵と説明されている。つまり『分類語彙表』は、意味によって分類された上で配列された語彙集であり、多くの日本語研究、その中でも特に

³⁹ 沖森卓也他『図解日本語』2006、三省堂、pp.71-79

⁴⁰ 近藤明日子・田中牧郎「学校教科書の語彙—語種を観点として—」『日本語学』第27巻第9号、2008、明治書院、pp.26-35

⁴¹ 同上 沖森他『図解日本語』,p71

⁴² 同上 p.12

⁴³ 国立国語研究所編『分類語彙表—増補改訂版』2004、大日本図書株式会社

⁴⁴ 国立国語研究所「コーパス研究センター」分類語彙表—増補改訂版データベース(ver1.0),

http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/goihyo.html

⁴⁵ 前掲『分類語彙表—増補改訂版』p.9

語彙研究で使用されている。同書に収められている語句は延べ語数で 95,811 語、異なり語数で 79,516 語⁴⁶である。分類方法は、大分類として品詞により 4 類に分けられている。名詞の仲間を「体の類」、動詞の仲間を「用の類」、形容詞の仲間を「相の類」、その他の 4 類である。本稿では動詞の意味範疇を分析するので「用の類」を参照することになる。類の下位には部門が置かれる。

「用の類」には、「抽象的關係」、「人間活動—精神および行為」、「自然現象」の 3 部門がある。そしてそれぞれの部門は中項目、更にその下に分類項目で分けられており、その分類項目の中に実際の語が記載されている。つまり全ての語彙に分類番号が付されている。当然のことながら同音異義語については、同じ語であっても部門、中項目、分類項目が違うところにそれぞれ分類されている。例えば、「見る」という語は、中項目「心」の分類項目「研究・試験・調査・検査」、「判断・推測・評価」、「注意・認知・了解」、「見る」、中項目「言語」の分類項目「読み」の 5 項目の中に収録されている。今回の副教材 2 冊にある同音異義語に関しては極力、本文にあたりそこで使用されている意味により項目を選定した。しかし、生活、算数、国語の教科書に関しては第一語義で分類している。そのため意味での分類に若干の誤差があることを付け加えておく。

2.3.1 部門別動詞

道徳副教材 2 冊の基礎データの中から「動詞」を取り出して部門ごとに分類したのが下表である。比較材料のために小学校低学年 3 教科の教科書の動詞データも同時に記載した。

表 7 部門別動詞数計

	『こころの』		『わたしたちの』		国語		算数		生活	
抽象的關係	54	40.9%	94	38.4%	157	49.8%	59	54.6%	154	57.9%
精神および行為	71	53.8%	135	55.1%	145	46.0%	47	43.5%	104	39.1%
自然現象	7	5.3%	16	6.5%	13	4.1%	2	1.9%	8	3.0%
計	132	100%	245	100%	315	100%	108	100%	266	100%

上表は出現する動詞の異なり語数である。『こころのノート』『わたしたちの道徳』において「精神および行為」の語数が他教科多いのは、道徳の教育内容を考えると想像できるものであるが、一方で、国語の教科書においては「抽象的關係」の方が多い。品詞別異なり語数では『わたしたちの道徳』と国語教科書は同様の傾向を見せ、一見するとその両者は「似ている」と言われがちであるが、「意味」という視点からその両者を比較すると道徳と国語の特性の違いが表れた。

⁴⁶ 前掲『分類語彙表—増補改訂版』p.3

2.3.2 中項目別動詞

用の類の中項目である「抽象的關係」「精神および行為」「自然現象」にみられるそれぞれの中項目別動詞数を表にしたものである。

a. 抽象的關係

表8 抽象的關係の教科別中項目

	『こころの』		『わたしたちの』		国語		算数		生活	
類	4	7.4%	4	4.3%	7	4.5%	2	3.4%	15	9.7%
存在	4	7.4%	7	7.4%	14	8.9%	7	11.9%	14	9.1%
様相	3	5.6%	3	3.2%	5	3.2%	1	1.7%	4	2.6%
作用	42	77.8%	76	80.9%	123	78.3%	46	78.0%	115	74.7%
時間	0	0.0%	2	2.1%	3	1.9%	0	0.0%	3	1.9%
空間	1	1.9%	2	2.1%	3	1.9%	1	1.7%	2	1.3%
量	0	0.0%	0	0.0%	2	1.3%	2	3.4%	1	0.6%
計	54	100%	94	100%	157	100%	59	100%	154	100%

中項目「作用」に入る語が高い割合で出現しているのが見てとれる。具体的には、『こころのノート』では、中項目の下位分類である小分類は24あり、最も数が多かったのは「合体・出会い・集合」類(出会う、会う、集める、合わせる、寄る)と「接近・接触・隔離」類(触れる、離す、離れる、貼る、触る)でそれぞれ5つずつの動詞であった。『わたしたちの道徳』では小分類は31あり、どの分類も数に偏りはなかった。一番多い分類では「進退」で、具体的な動詞は「返る、進む、返す、進める、引き返す、戻る」の6つであった。国語は32の小分類、算数は22の小分類、生活は34の小分類であった。

b.精神および行為

表 9 精神および行為の教科別中項目

	『こころの』		『わたしたちの』		国語		算数		生活	
	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
心	31	43.7%	49	36.3%	50	34.5%	20	42.6%	41	39.4%
言語	7	9.9%	15	11.1%	26	17.9%	8	17.0%	17	16.3%
芸術	2	2.8%	3	2.2%	3	2.1%	0	0.0%	0	0.0%
生活	14	19.7%	25	18.5%	36	24.8%	7	14.9%	15	14.4%
行為	0	0.0%	2	1.5%	3	2.1%	1	2.1%	4	3.8%
交わり	5	7.0%	11	8.1%	6	4.1%	0	0.0%	3	2.9%
待遇	4	5.6%	13	9.6%	8	5.5%	2	4.3%	4	3.8%
経済	3	4.2%	4	3.0%	8	5.5%	6	12.8%	12	11.5%
事業	5	7.0%	13	9.6%	5	3.4%	3	6.4%	8	7.7%
計	71	100%	135	100%	145	100%	47	100%	104	100%

精神および行為を中分類に分けると「心」に関する語がどの教材も多かった。『こころのノート』では 31 の語彙数に対してその下位分類は 16 に分かれ、「見る」の項目（振り返る、見付ける、見詰める、覗く、見分かる）が 5 つで最も多かった。『わたしたちの道徳』は 24 の小分類に分かれ最も多い小分類は「表情・態度」で具体的には「泣く、笑う、威張る、押さえる、泣き出す、膨らむ」という 6 語であった。国語は 21 の下位分類、算数は 9、生活は 14 の下位分類だった。

c.自然現象

表 10 自然現象の教科別中項目

	『こころの』		『わたしたちの』		国語		算数		生活	
	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
自然	1	14%	5	31%	4	31%	0	0%	1	13%
物質	2	29%	2	13%	4	31%	1	50%	3	38%
生命	4	57%	9	56%	5	38%	1	50%	4	50%
計	7	100%	16	100%	13	100%	2	100%	8	100%

どの教材においても「自然現象」の項目においては、語彙の数は少なかった。『わたしたちの道徳』が 16 と語彙数が多いのは、当該副教材は、4 つのテーマで構成されており、その 1 つが「いのちにふれて」という命に関するものであるためと考えられる（命に関する読み物が 2 編掲載されている）。

3. 比較検討

ページ数に関して『わたしたちの道徳』は大幅増となっており 1章で指摘した今般の全面改訂のねらいがそのまま数字となって表れている。『こころのノート』では読み物は1編であったが、『わたしたちの道徳』では読み物が13編収録されていることからページ数が増えた。

4品詞の自立語の比較では、1点目として語数に注目したい。『こころのノート』から『わたしたちの道徳』へページ数は約1.7倍の増であったが、異なり語数は約2倍増となっている。『わたしたちの道徳』では読み物(文章)が大幅に増加しているため語彙数が増加したものとする。また読み物部分以外においても、少しずつ語が増えている。例えば以下は教材冒頭の「つかい方」の部分すべてを抜粋した比較表である。

表11 「使い方」比較

『こころのノート』 pp. 6-7 「このノートの使い方」	『わたしたちの道徳』 pp. 4-5 「この本の使い方」
すきなときにすきなところをひらいてみよう。 くりかえし何でも同じページを見てもいいんだよ。 かいたりぬったりはったりしてみよう。 いろいろな人と話し合うのもいいね。 いろいろな人に聞いてみるのもいいね。 自分の「こころのノート」を作ろう。	学校で ・道徳の時間で ・そのほかのじゅぎょうで ・休み時間やほうか後に 家で ・家の人といっしょに 地域で ・地いきの人といっしょに 書いたりぬったりしてみよう。 読みものを読んで考えよう。 友だちと考えを話し合おう。 家の人に書いてもらおう。いろいろな人と話し合おう。 いつでも、どこでも、何度でもひらいてみよう「わたしたちの道徳」。生きていく上で大切なことを考え、自分の生き方に生かしていこう。

これをweb茶まめで語彙分析したものが下表である。

表 12 「使い方」部分の形態素解析

	『こころの』			『わたしたちの』		
	延べ	異なり	異なり／延べ	延べ	異なり	異なり／延べ
形状詞	4	2	50.0%	4	2	50.0%
形容詞	3	1	33.3%	0	0	0.0%
助詞	25	10	40.0%	38	9	23.7%
助動詞	5	1	20.0%	10	2	20.0%
接尾辞	0	0	0.0%	3	3	100.0%
代名詞	0	0	0.0%	3	3	100.0%
動詞	12	9	75.0%	19	12	63.2%
名詞	11	10	90.9%	28	19	67.9%
連体詞	1	1	100.0%	1	1	100.0%
計	61	34	55.7%	106	51	48.1%

同じ内容項目の読み物以外のところでも語彙数が増加しているのがわかる。ただし、異なり語数／延べ語数では『わたしたちの道徳』の方が割合が低い。これは『こころのノート』では標語的な表現が多かったのに対し『わたしたちの道徳』では文章で表現されているため語彙数が増加したが、同じ語彙を何度も使うことで（述語部分が「ましょう」で統一されているなど）単純化した文であるためと考えられる。

2点目として名詞の中で固有名詞の変化を挙げたい。固有名詞とは人物名や地域名、国名などである。表4で示した名詞数のうち、固有名詞を抜き出した内訳は下表の通りである。

表 13 名詞内訳

	『こころの』		『わたしたちの』	
	数	割合	数	割合
固有名詞	4	0.3%	192	7.6%
普通	1,161	99.7%	2,329	92.4%
計	1,165	100%	2,521	100.0%

『こころのノート』ではわずか4語で、ロボットの名前としての「タロベー」p. 26、カードの図に書かれている子どもの名前としての「はやと」p. 52、そして「こころのノート」の作成者の一人の名前である「かわい」「はやお」(p. 104)である。対して『わたしたちの道徳』の固有名詞は、猿の「るっぺ」、うさぎの「ぴよんた」(pp. 16-19)といった物語の登場人物（動物の愛称）名、「二宮」「金次郎」「尊徳」(pp. 28-31)や「武者小路実篤」(p. 33)、「日野原重明」(p. 69)、「林柳波」(pp. 112-113)などの著名人名、「サザエさん」(pp. 162-165)のような漫画の主人公名、「砥部」

(pp. 104-105) や「但馬」(p. 95)、「サウジアラビア王国」(p. 65)といった地名国名などが激増している。小学校入学時の子どもたちが持つ語彙量は家庭環境に大きく依存する。まして固有名詞の既知量、理解量に個人差が多いことは容易に想像できる。先行研究⁴⁷⁾によると、文章を読んで理解するには96%以上の既知語率が必要ということである。また蒙韞によると⁴⁸⁾未知の固有名詞の解釈プロセスには、「言語心理学でいうガーデンパス文の解析に必要な『再解釈』というパターンが観察された」とのことである。これは「固有名詞の意味を普通名詞と解釈し、それが文脈の理解と整合しなければ、そこまでの判断が放棄され、再解釈が行われ、そこで固有名詞の解釈が発見できれば推測は成功し、発見できなければ失敗となる」ということである。つまり固有名詞が固有名詞であると判断することも、そしてその意味を推測することも文脈に依存するということであり、小学校低学年の教材であれば、その子どもがもつ語彙量に大きく左右されると考えられる。家庭環境により本に接する機会が少なかった子どもたちや、外国につながりを持つ子どもが小学校から日本に来た場合など、語彙量が少ないと推測できる子どもたちにとって、教材に掲載される固有名詞の増加は、既知語率を下げ、周りの文脈からの推測も難しくなるということである。

他教科の教科書との語彙の比較においては(図1参照)、『わたしたちの道徳』と『国語』がほぼ同様の語彙数、品詞構成であることがわかった。道徳の読み物と国語が似ている、その違いがわからないなどよく言われることであるが⁴⁹⁾、語彙数、品詞構成という観点からいうと納得できることである。算数については出現する語彙がどの品詞も少なく抑えられており、語彙力に依存することなくその教科内容を学べる教材であることが示されている。生活は、圧倒的に名詞数が多い。動詞、形容詞、副詞は『わたしたちの道徳』や国語と変わらないことから、知識としての名詞⁵⁰⁾を詰め込んだ教材であることがわかる。語彙数、品詞構成については教科の内容特徴と関係があるといえる。

語種の検討においては、和語が増加したという結果であった。和語の何が増加したのか品詞別に伸び率に着目したのが表14である。

⁴⁷⁾ 小森和子他「文章理解を促進する既知語率に関する一考察」『言語情報科学(3)』2005,pp.71-85

⁴⁸⁾ 蒙韞「文章理解過程における日本語学習者の固有名詞の意味理解：文脈の手がかりに着目して」『国立国語研究所論集14』2018,pp.125-143

⁴⁹⁾ 道徳の教授法の書籍(横山利弘監修『楽しく豊かな道徳科の授業をつくる』2017,ミネルヴァ書房,p36)や教科書会社のホームページ(光村出版ホームページ http://www.mitsumura-tosho.co.jp/tokubetsu_dotoku/column/qa/vol15.html (2018/04/14 閲覧))などに道徳の読み物と国語との違いは何かと書かれているように、その両者は似ていると言われることがある。

⁵⁰⁾ 地名、国名などの他、植物名(シロツメ草等)、昆虫名(かなぶん等)、食物名(干し芋等)、天気用語(雪雲等)素材名(竹ひご等)など幅広い分野から多くの名詞が使用されている。

表 14 道徳副教材 2 種の和語における品詞数

	『こころの』	『わたしたちの』	伸び率
感動詞	48	82	71%
形状詞	17	59	247%
形容詞	113	219	94%
助詞	1,387	3,209	131%
助動詞	356	1,273	258%
接続詞	7	34	386%
接頭・接尾辞	50	285	470%
代名詞	74	148	100%
動詞	661	1,552	135%
副詞	90	208	131%
名詞	652	1,525	134%
連体詞	64	100	56%
	3,519	8,694	147%

『こころのノート』から『わたしたちの道徳』の和語の伸び率は147%である。この数で線引きし147%以上のものを見ると、形状詞、助動詞、接続詞、接頭辞・接尾辞である。逆に147%以下は感動詞、形容詞、助詞、代名詞、動詞、副詞、名詞、連体詞であった。大まかに捉えると和語全体で147%の伸び率があるにも関わらず、自立語は伸び率を下げ、付属語が大幅に増加している。具体的には、一番伸び率が高かった接頭・接尾辞で言えば、「～さん」（お母さん、お父さん、カメさん、うさぎさん等）「お」（お母さん、おふろ、お世話、おとしより、お日さま、おみそしる等）が急増している。これは読み物に多く使用されている。

漢語についての品詞別増減を示したものが表15である。伸び率55%を基準にすると、それ以上は形状詞、代名詞、名詞で、55%以下だったものは接頭・接尾辞、副詞であった。

表 15 道徳副教材 2 種の漢語における品詞数

	『こころの』	『わたしたちの』	伸び率
形状詞	46	88	91%
接頭・接尾辞	61	78	28%
代名詞	7	22	214%
副詞	18	14	-22%
名詞	487	758	56%
	619	960	55%

最も伸び率が高かったのは代名詞である。これを具体的にみると双方とも異なり語数は1で、具体的な語彙は「ぼく」であった。

これらを整理すると、和語の中で伸び率が高かったものは付属語であった。漢語については自立語の副詞や名詞は伸び率が低調であり、伸び率が高かった代名詞はその実、異なり語数は1種であった。つまり一般的に和語が増加し、漢語が減少すると文は平易化していると言われるが、道徳副教材2種における和語と漢語の変化を品詞から観察すると、平易化つまり簡単になっていると言うより、何度も同じ表現の繰り返しで単純化されているのではないかと考える。語数、品詞構成が似ていると言われる国語のように文の豊かな表現を学ぶのが目的なのではなく、文末表現を同じにして単純化を図り、道徳的な内容を子どもにより届きやすくしているのではないだろうか。

意味別分類の比較では、第1点目として道徳副教材2冊と他3教科とで大きな違いがあることがわかった。表7をわかりやすく図表化したものが図4である。動詞の3部門の割合において道徳副教材は「精神および行為」が大きく、他3教科は「抽象的關係」が多いということである。副次的な結果であるが、この図から「道徳と国語の違いがわかりにくい、似ている」と言われていることへの1つの答えも示唆された。つまり、語数や品詞構成など表面上は似ている構成であるが、使用されている語（この場合は動詞に限るが）の意味内容の割合が違っているということである。

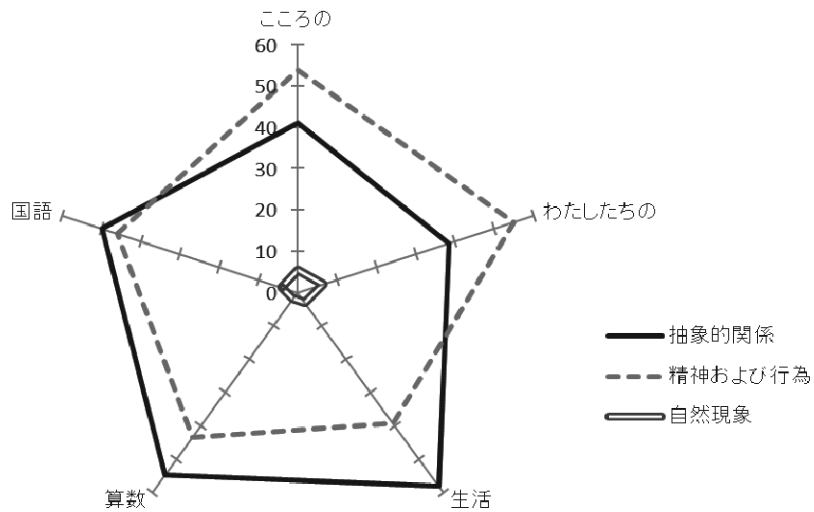


図4 教科別意味分類部門比較

「精神および行為」部門の下位分類である中項目に注目して観察してみると、どの教材も「心」の項目が一番多かった。

表 16 「心」の項目の語彙数と下位分類数

	こころの	わたしたちの	国語	算数	生活
語彙数	31	49	50	20	41
分類数	16	24	21	9	14

表 16 は、中項目「心」のそれぞれの教材の語彙数と「心」を更に下位分類した小項目の分類数である。『こころのノート』から『わたしたちの道徳』へ「心」の項目で語彙数もその下位分類数も増えている。つまり「心」に関する語彙が増えているということである。『こころのノート』に無く『わたしたちの道徳』にある小項目は「安心・焦燥・満足」で「あわてる」（具体的には、「はしの上のおおかみ」という物語の内の「おおかみはあわてておじぎをしました」p72, 「うさぎはあわてて、引きかえそうと」p73）、「苦悩・悲哀」の「悩む」（具体的には、「まんががすきーまんが「サザエさん」を作った長谷川町子」に出てくる「町子はまんがにどのような人かこうかとなやんでいました」p164）などである。道徳副教材 2 冊にあり、他 3 教科に無かった小項目は「自信・誇り・恥・反省」でいずれも「張る（胸を張る）」「コロは、はずかしかったけれど、むねをはって歌ってみました」『わたしたちの道徳』p51, 「むねをはっていこう」『こころのノート』p10,p13,p94 であった。一方、他の教科にあり道徳副教材に無い小項目は、「比較・参考・区別・選択」であった。国語で言えば、「選ぶ、比べる、照らす、取り上げる」、算数では「選ぶ、比べる」、生活は「選ぶ、比べる、照らし合わせる」の語が使用されている。現行の学習指導要領⁵¹は「生きる力」を子どもたちが獲得することをめざし実施されている。その中で知識基盤社会やグローバル化がより進展する社会では、「自ら課題を発見し解決する力、 コミュニケーション能力、 物事を多様な観点から考察する力（クリティカル・シンキング）、 様々な情報を取捨選択できる力などが求められる」⁵²とされており、それを反映し教科書では「比較・参考・区別・選択」に属する語彙が使用されていると考えられるが、道徳の副教材ではこの分類に属する語彙は 0 であった。

「自然現象」部門は、どの教材とも語数が少ないのでこの数字からは何かを導き出すことは避けなければならないが、教科の性質上多いと思われる生活の教科書より、『わたしたちの道徳』の方が多なのは、指導要領の「自然や崇高なものとかかわりに関すること」の中の「生きることを喜び、生命を大切に作る心をもつ」に沿う形となっていることがわかる。

おわりに

本稿では、文部科学省が 2014 年に作成した道徳の副教材『わたしたちの道徳』と、それ以前使用されていた副教材の『こころのノート』の語彙分析を行った。加えて小学校低学年教科の教科

⁵¹ 文部科学省、小学校指導要領 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm (2018/04/14 閲覧)

⁵² 文部科学省、学習指導要領「生きる力」ポイントがわかるパンフレットより (http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/pamphlet/index.htm) 2018/04/14 閲覧

書との語彙の比較、検討も行った。その結果、「学習指導要領に示された内容項目ごとに読み物部分とノート部分をセットにしたものを作成する必要がある」として出来上がった『わたしたちの道徳』は、その意味通りページ数が増加し、それに伴い語数が増加したことが明らかになった。語種の分析からは和語割合が増加し、漢語割合が減ったことがわかった。一般的には、語数が増えたと語彙力がない子どもにとっては負担が増える。その反面、和語が多い文は平易な文とされる。つまり相反する結果が『こころのノート』から『わたしたちの道徳』では起こっていた。

動詞の意味分類の分析では道徳の副教材で使用されている動詞割合は他教科の動詞より「精神および行為」が多く、「抽象的關係」が少ないことがわかった。特に『わたしたちの道徳』では「精神および行為」の下位分類の「心」に関する語がバリエーション豊かに多く使用されていることがわかり、「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的に多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」とする道徳科の目的に沿ったものであるといえよう。つまり道徳の副教材『こころのノート』から『わたしたちの道徳』へと変わったのは「教科としての道徳」を見据えたものであった。また道徳は他教科とは一線を画す意味内容であることも明確になった。

今回、分析を行ったのは「道徳」を語彙から分析するという試みの第1歩に過ぎない。小学校1.2年生用のみで他学年、中学校用は行っていない。意味範疇の分析については動詞のみに留まった。また教育政策の流れとの関係性も検討していない。生活、算数、国語の教科書の意味に関しては第一語義で分類しているため誤差があることも承知している。従って本稿が明らかにしたのは、道徳副教材のごく一部分である。これらを課題として挙げ、今後は2018年の教科科で出版された教科書を分析し「道徳科」が教えようとしているものを明らかにしていきたい。

参考文献

- 国立教育政策研究所『教育課程の改善の方針，各教科等の目標、評価の観点等の変遷—教育課程審議会答申、学習指導要領、指導要録（昭和22年～平成15年）—』2005
- 文部科学省『日本の成長と教育』1962
- 文部科学省『平成14年度 文部科学白書新しい時代の学校～進む初等中等教育改革～』2002
- 国立国語研究所『日本語基礎語彙—文献解題と研究—』2000, 明治書院
- 国立国語研究所「コーパス開発センター」形態語情報 http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/morphology.html
- 小椋秀樹他「形態論情報規定集第4半（上）」『現代日本語書き言葉均衡コーパス』2011, 国立国語研究所
- 近藤明日子・田中牧郎「学校小学校の語彙—語種を観点として—」『日本語学』2008, p. 30
- 沖森卓也他『図解日本語』2006, 三省堂, pp. 71-79
- 益岡隆志・田窪行則『基礎日本語文法—改訂版—』1992, くろしお出版, p. 12
- 小森和子他「文章理解を促進する既知語率に関する一考察」『言語情報科学(3)』2005
- 蒙 韜「文章理解過程における日本語学習者の固有名詞の意味理解：文脈の手がかりに着目して」『国立国語研究所論集14』2018, pp. 125-143

国立国語研究所編『分類語彙表—増補改訂版』2004, 大日本図書株式会社

国立国語研究所「コーパス研究センター」分類語彙表—増補改訂版データベース(ver1.0),

http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/goihyo.html

文部科学省『こころのノート小学校1・2年』2002

文部科学省『わたしたちの道徳小学校一・二年』2014

文部科学省「学習指導要領」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/index.htm